

# メフィストフェレスの「蚤の歌」(ゲーテの『ファウスト』より) 動物寄生虫としての蚤と〈蚤文学〉の伝統について

石原 あえか

## 0. はじめに 「蚤の歌」付曲と問題提起

「Es war einmal 昔々あるところに…」というドイツ語の語りだしは、童話や民謡のお約束のフレーズである。ゲーテのライフワーク、学者を主人公とした悲劇『ファウスト』第一部で印象に残る民謡と言えば、グレートヒェンが着替えをしながら口ずさむ『トゥーレの王』がまず想起されるだろう。「昔トゥーレに王様がおりました Es war ein König in Thule,…」のフレーズで始まるこの詩を、森鷗外こと森林太郎(1862-1922)は「昔ツウレに王ありき…」と七五調で訳した。架空の北の国トゥーレの王は、寵姫(厳密に言えば、正妃ではない側妃)の死後も彼女から贈られた金の杯を大切に使っていた。死期が近づき、息子や忠臣に形見分けをしてもそれだけは手元に残す。最後の一滴を飲みほし、海に投げ捨てると同時に息を引き取る。この後、ファウストとの間に私生児を身ごもり、嬰兒殺しの罪で処刑される運命を負うグレートヒェンの「誠実で変わることをない愛」に対する純粹で切ない憧れが吐露されている。実際の舞台では、ゲーテの音楽指南役だったツェルター(1758-1832)の付曲(1812年)メロディーが使われることが多いようだが、ライヒャルト、シューベルトはもちろん、シューマン、リスト、ベルリオーズなど多くの作曲家が曲を付けている。

さて、本稿では同じ『ファウスト』第一部所収だが、これと似た出だしを持ちながら、悪魔メフィストフェレス(以下、メフィストと略)がライブツィヒの学生酒場で皮肉たっぷりにおどけて歌う全く性質の異なる劇中歌、通称「蚤の歌 Flohlied」に注目したい。始まりは『トゥーレの王』とほんの少し違うだけの「昔々あるところに王様がおりました Es war einmal ein König」というフレーズ。こちらはベートーヴェン(歌曲集『6つの歌』Op. 75 第3曲)とムソルグスキーの「蚤の歌」と正式名称「アウエルバッハ酒場でのメフィストフェレスの歌」(ただし歌唱中の笑い声はムソルグスキーのオリジナル)のふたつが有名で、それぞれ編曲もある。加えてベルリオーズ(『ファウストの劫罰』第2部のバリトン独唱)、ワーグナー(『ファウストによる7つの歌曲』Op. 5 第4曲)、キーンツル(『3つの歌曲』Op. 25 第2曲)、ブゾーニ(『2つのゲーテの詩』Op. 49 第2曲)などの付曲もあるのだが、『トゥーレの王』と比べると、『ゲーテ事典 Goethe-Lexikon』や『ゲーテ便覧 Goethe-Handbuch』に独立した項目はなく、詳細な作品解説・注釈にも乏しい。これは主人公である王の愛玩対象の違い、前者は寵姫の形見の黄金の杯、後者は昆虫ないしは動物寄生虫の蚤であることが多分に影響しているものと考えられる。だが現代の読者にとってはなじみの薄い、この昆虫にして〈寄生虫〉たる蚤にフォーカスすると、

ゲーテ時代の文化・社会、さらに自然科学と文学の相互影響関係がくっきりと浮かび上がってくる。

以下、まずはオーソドックスに (1) この詩の成立過程と一般的解釈を確認し、そのうえで (2) 蚤についてのゲーテ時代の自然科学的知識とその変遷について、(3) 文学的伝統、特に所謂〈蚤文学 Floh-Literatur〉と呼ばれるジャンルの中での比較・検討、作品の位置づけを行う。

## 1. 「蚤の歌 Flohlied」の成立の周辺と解釈変遷

「蚤の歌」は、ジャンルではなく時間軸を重視して編纂された『ミュンヘン版ゲーテ全集』(略称 MA)<sup>1</sup>に、1 巻第 2 分冊 (以後、1.2 のように表記し、頁数を添える)、3 巻第 1 分冊、6 巻第 1 分冊の計 3 回収録・登場する。

まず、『ファウスト』第一部における劇中歌成立を時系列的に整理するならば、メフィストがこの歌を披露する直前に学生ブランダーが歌う「昔々地下室にネズミが巢食っておりました」は当初は「Es war ein Ratt im Keller Nest」(1.2, 147)、最後は「Es war ein Ratt' im Kellernest」(3.1, 538) と若干綴り表記を変えながら同様に 3 回収録、いずれもかなり早くから構想・執筆されていたことがわかる。ちなみに「トゥーレの王」は、トゥーレの綴りが Thule と Tule の間で揺れ、元の Thule に決まるが、計 4 回、全集初出は 1.1, 252 で、「1774 年夏成立」と記されている (1.1, 885)。

この最初期、すなわち 1775 年までの詩を集めた MA 1.1 には、Es war einmal… と始まる詩が他にも 3 作収録されている。「昔々あるところに、～がおりました」の主語にそれぞれ「独身の若い職人 ein Hagenstolz」(1.1, 115)、「貴人 ein edler Herr」(1.1, 170)、「大工職人 ein Zimmergesell」(1.1, 174) が入る。3 つのうち、一番成立が早い「独身の若い職人」が登場する詩は、「ピグマリオン、ロマンツェ」という詩のタイトルが示すようにオヴィディウスの『変身物語』に取材したもの。ピグマリオン伝説は 18 世紀に好まれた題材のひとつだが、原作とはニュアンスが変わっていて、頑固な若い職人ピグマリオンを滑稽化する傾向にある。ゲーテも原作のヴィーナスが彫像に息を吹き込むエピソードをあえて削除し、卑猥なロマンツェ〔物語詩〕に変容させている。続く「貴人」が主語の *Das Leid vom Herrn und der Magd* は奉公人の娘と恋仲になり、彼女を孕ませた貴人と娘の悲しい末路を歌った、15 世紀あたりからドイツ文学でもお馴染みのあらすじのバラードである。3 つ目の詩の主人公である大工職人は、辺境伯夫人に誑かされ、彼女との共寝が発覚し、処刑されそうになるが、市長の機転で、財産は没収されるが、命だけは助けられる。いずれもハッピーエンドとは程遠く、不快な読後感が残る共通点がある。

さて、「蚤の歌」には 3 段階の掲載過程がある。初出は『ファウスト』の最初期の姿、ヴァイマル宮廷の侍女ルイーゼ・フォン・ゲヒハウゼンが密かに複写した草稿『原ファウスト *Urfaust*』(MA 1.2, 149) だが、成立時期はいまいで、ただし遅くとも 1775 年 6 月のスイス旅行以前には「アウエルバッハ酒場」の場面は完成していたと考えられている。しかしその後、『ファウスト』一部の執筆は遅々として進まず、ゲーテはとうとう 1789 年に未完成の——グレートヒェン

<sup>1</sup> Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Münchner Ausgabe [MA] in 21 Bänden, hrsg. von Karl Richter u. a. München (C. Hanser) 1985-1998.

悲劇を締めくくる牢屋の場面を欠き、彼女の兄ヴァレンティンも登場しない——「断片 Fragment」という形で刊行を決意する。この3.1所収の『ファウスト断片 *Faust: Ein Fragment*』における「蚤の歌」については、小さな表記上の修正を除けば、ほぼ変更はない(3.1, 541)。筋の変更はむしろこの後、テーブルに開けた穴からふんだんにワインを出す魔術の行使者が、ファウストからメフィストに移行したことだろう。このかなり荒っぽいワイン注ぎの魔法場面は、エアフルト伝来の『ファウスト本』(1589年)に取材しているが、ワインをさらに地獄の炎に変えたのはゲーテのオリジナルである。『ファウスト』第一部は盟友シラーの叱咤激励なくしては完成しなかっただろうが、ともあれ1806年春に脱稿、1808年に『悲劇ファウスト *Faust: Eine Tragödie*』として刊行された。こちら詩テキスト自体に行の増減などはなく、したがって『原ファウスト』とはほぼ同じである。以下、この決定稿「蚤の歌」(6.1, 595f.)全訳を示す。左欄が約1世紀前の森鷗外による歴史的翻訳、右が直訳に近い拙訳である。

昔昔王がゐた。  
大きな蚤を持ってゐた。  
自分の生ませた子のやうに  
可哀がって飼ってゐた。  
或る時服屋を呼んで来た。  
服屋が早速遣って来た。  
「この若殿の召すような  
うはぎ  
上衣とずぼんの寸を取れ。」

天鵞絨<sup>じたて</sup>為立、絹為立、  
為立卸を着こなした。  
上衣にや紐が附いてゐる。  
十字章さへ下げてある。  
すぐ大臣を言い附かる。  
大きな勲章をぶら下げる。  
兄弟までも宮中で  
立派なお役にあり附いた。

文官武官貴夫人が  
参内すれば責められる。  
きさき  
お后さまでも宮女でも  
ちくちく螫される、かじられる。  
押さえてぶつりと潰したり、  
搔いたりしては相成らぬ。  
己達ならば蚤なぞが  
ちよぴりと螫せばすぐ潰す<sup>2</sup>。

昔々あるところに王様がおりました。  
大きな蚤を飼っておいでで、  
御寵愛少なからず  
実子のように大切になさっておられました。  
ある日、仕立屋をお召しになり  
早速参上した仕立屋に命じたことには  
「この青年に着せる上着と  
ズボンの採寸をせよ」。

ビロードとシルクに包まれ  
蚤はとてもエレガントな着こなしに。  
上着はリボンで飾られ  
十字章も下げられて。  
すぐに大臣を拝命し  
大きな星型勲章も頂戴しました。  
その兄弟姉妹も皆  
宮廷の要職に就きました。

宮廷の高貴な皆様方は  
たいそうなお苦しみ。  
女王様も侍女たちも  
刺されるわ、齧られるわ、  
でも潰すのはご法度だから  
搔いたり、潰したりも出来ません。  
我らがもしチクリと刺されたら  
たちまち潰して息の根を止めますが。

韻律に注目すると、学生ブランダーが直前にしかつめらしく歌う「鼠の歌」には讃美歌調のルター詩節が使われているのに対し、メフィストの歌う「蚤の歌」は、庶民的文学や民謡的な詩に常用され、特に18世紀初頭の快活な流行歌に用いられたヒルデブランド詩節が使われている。詩の主題が「情実人事」なのは明快で、『原ファウスト』の劇中歌としてゲーテが朗読・披露した時は、宮廷への市民風刺であるとともに、痛烈な自虐に使い、笑いを誘っていたと考えられる。フランクフルト版（略称FA）<sup>3</sup>の注釈者A. シューネも指摘するように、ひょっとするとこの詩の成立は若き君主カール・アウグストに招聘され、ヴァイマル公のお気に入りとしてゲーテが枢密院メンバーそして大臣に任命された時期と重なっているのかもしれない（FA I-7.2, 279）。他方、歌詞にはほぼ変更はないが、『原ファウスト』をゲーテが気の置けない仲間に朗読していた時と『ファウスト断片』刊行の間には隣国の大きな政治的変動、フランス大革命勃発があった。「蚤の歌」前後でライプツィヒを新たに「小パリ」（2172行）と呼ばせ、「自由万歳！」と叫びながら痛飲する野蛮な学生たちの描写により、『ファウスト断片』以降のアウエルバッハ酒場の場面をゲーテは作者の自虐から大革命の危険な兆候への読み替えを図ったのだった。

## 2. 動物寄生虫としての蚤

### (1) 蚤のサーカス

ゲーテ時代には郵便馬車の旅が普及しつつあったとはいえ、小国が林立するドイツでは、国境を越える度の検閲・両替の煩雑さもさることながら、宿の寝台で虱や蚤との正当防衛に終始し、一晩中眠れないのも常のことだった<sup>4</sup>。公私ともに旅が多かったゲーテは、不潔な宿しかない場合は馬車の中で夜を明かしたという。

メフィストが歌う王様の愛玩対象たる〈蚤〉は、昆虫の仲間、虱と双璧をなすヒトの外部寄生虫である<sup>5</sup>。寄生虫は人の体内に棲む「内部寄生虫」と人の体の表面に棲む「外部寄生虫」のふたつに分類できる。後者の蚤だが、猫にはネコノミ、犬にはイヌノミ、人間にはヒトノミが寄生するが、虱のような強い宿主選択性はないため、たとえばネコノミは人も犬も吸血する。言い換えれば、血液嗜好性はあまりない。人間に寄生するヒトノミ（*Pulex irritans*）は、蚊と同様、二酸化炭素を感知して宿主を探し、注射針のような口器で吸血する。キチン質で覆われた左右に扁平な流線形系の体は、宿主の体毛をかき分けて移動することに特化している。祖先は翅があっ

<sup>2</sup> [J. W. v. ゲーテ作] 森林太郎譯：『ファウスト 第一部』富山房 1913 年、p. 221-223 より引用、できる限りオリジナル表記を維持するよう心がけたが、やむを得ず変更した部分がある。

<sup>3</sup> Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. Frankfurter Ausgabe [FA] in 40 Bänden, hrsg. v. Hendrik Birus u. a. Frankfurt a. M. (Deutscher Klassiker Verlag) 1985-1999.

<sup>4</sup> Preisendörfer, Bruno: *Als Deutschland noch nicht Deutschland war: Reise in die Goethezeit*. Berlin (Galiani) 2015, S. 68 参照。

<sup>5</sup> 蚤については、特集アスペクト 48『蟲実話 寄生虫、害虫との正しいつきあい方』1998 年所収の三原寛解説：「シラミとノミの話」p. 145；目黒寄生虫館監修『寄生蟲図鑑 ふしぎな世界の住人たち』飛鳥新社 2013 年、p. 58 f. などを参照。

たと推測されるが、宿主の体表を移動する際に翅は体毛に引っかかって邪魔なため退化した。代わりに体重のわりにとてつもなく進化した脚力を備え、体調の数十～数弱倍の距離を弾丸のように跳躍できるようになった。現在、世界で唯一の寄生虫の博物館である東京・目黒寄生虫館監修の『寄生蟲図鑑』にも蚤は「寄生虫界随一の運動能力」の持ち主として紹介されているが、続けて以下のような記述がある。

この高い跳躍能力を買われ、彼ら〔ヒトノミ〕は人間によって「ノミのサーカス」という芸をさせられることがある。ノミが馬車の模型を引いたりダンスをしたりするのだが、犬や猿などの芸とは違いノミたちは反射で飛び跳ねているだけである。とにかく血を吸って繁殖すること、ノミたちの生きる目的はそれだけだ<sup>6</sup>。

ゲーテの「蚤の歌」の蚤も、大臣の礼服に身を包み、勲章を下げていたが、「蚤のサーカス」については、ドイツ・ロマン派の奇才 E. T. A. ホフマンの最後の冒険メルヒェン『蚤の親方 *Meister Floh*』(1822 年)の「第二の事件」冒頭に「蚤の曲芸師の話」として類似の詳しい——上等の虫眼鏡や顕微鏡で拡大すると、蚤に着せた煌びやかな軍服や精巧な小道具に唸られるという——描写がある。

これがファンタジーではなく、実際に興行される「地上最小のショウ」だったことは、昆虫学者・安松京三(1908-83)による同名のエッセイに詳しい<sup>7</sup>。安松によれば、蚤のサーカスの発祥はフランス・パリで、ルイ 14 世の天覧にも浴した。蚤のなかでも体が大きいヒトノミだからこそ可能な興行で、白い布に覆われたテーブルを 20-30 人程度の観客が取り囲み、「二匹のノミが自分の体重の二千倍もあるローラーや大砲を引いたり、一匹で大きな回転木馬を回わしたり、オルゴールの音に合わせて、赤や青の円錐形のスカートをはいた(実際はかぶせた)ノミがダンスをしたりする」(同 p. 187)のを見物する代物だった。しかも安松がこのエッセイを執筆した時期は、DDT 噴霧による蚤・虱の駆逐が成功しつつあり、芸ができるヒトノミが不足し、買取広告が出ていたという。さらにここで紹介されている 1951 年 3 月 4 日号『サンデー毎日』第 30 巻 9 号の記事によれば、広島 of 舞踏研究家・平櫛健二郎夫妻が、メフィストの「ノミの唄」の舞踏化を企画、シーズンオフで入手が難しかったので呼びかけたところ、全国から 300 余匹のノミが送られてきた由。4 か月かけて振付を完成、三幕ものの近代バレエ『ノミの歌』を 5 月 13 日に初演した、とある (p. 190 f.)。

## (2) 蚤の顕微鏡スケッチ

蠟燭の光の中で身体に付着した蚤を探して戯れる姿は、16～18 世紀の近代絵画や陶製人形の題材のひとつである。女性の胸元や下着に隠された柔らかな皮膚に取りつき、吸血する蚤は、エロティックなメタファーでもある。これとは別に顕微鏡下で蚤を拡大し、隅々まで観察したの

<sup>6</sup>『寄生蟲図鑑 ふしぎな世界の住人たち』、p. 59 から引用。

<sup>7</sup>安松京三：『昆虫と人生』新思潮社 1968 年、「地上最小のショウ」pp.184-191.

<sup>8</sup>正式名称は『微小体の顕微鏡図譜とその学問的記述について』



が、イギリスの哲学者ロバート・フック（1635-1703）だった。フックの『顕微鏡図譜 *Micrographia*』（1665 年）<sup>8</sup>には昆虫、植物、無機物など計 70 点の顕微鏡スケッチが収められているが、『蚤の拡大図』は有名な図版のひとつだ。この図はゲーテが所蔵する 1687 年にニュルンベルクで刊行されたドイツ語増補改訂版『新顕微鏡図譜 *Micrographia nova*』<sup>9</sup>に図 6 番として掲載されている。ちなみにフックの『蚤の拡大図』は、E. T. A. ホフマンが自ら描いた『蚤の親方』の表紙と裏表紙——表紙は明らかにフックのスケッチをもとにした蚤がブーツを履き、裏表紙はトーガをまとい、松明を手になっている——のイラストの元にもなった。

ドイツ語圏での最初期の昆虫学者としては、ゲーテと故郷を同じくする、フランクフルト生まれの女流昆虫画家マリア・ジヴィラ・メリアン（1647-1717）が挙げられる。彼女の次の世代に属し、学問的に通用する精緻で完成度の高い昆虫画を仕上げたのが、アウグスト・ヨーハン・レーゼル・フォン・ローゼンホーフ（1705-59）である。祖先はオーストリア貴族だがニュルンベルクに根を下ろしたレーゼル・フォン・ローゼンホーフの祖父は画家、父は銅版画家だった。彼自身は最初細密画家として出発したが、昆虫研究に開眼し、1740 年に 300 種の蝶在来種についてドイツ語で詳細に記述した『昆虫の愉しみ *Insecten-Belustigungen*』を出版、その精緻で美しく完璧な絵画描写と個々の詳細な学術的叙述により高い評価を得た。正確なタイトルを『隔月発行の昆虫の愉しみ』<sup>10</sup>とするレーゼル・フォン・ローゼンホーフの著作は、ゲーテが監督官を務めたヴァイマル図書館が全巻所蔵している。この著作は彩色銅版画で、形態学に従事したゲーテであれば興味を抱いて当然と言えるのだが、事実、この著作をゲーテ自身が 1817 年 11 月 4 日～翌年 7 月 4 日まで借り出した記録が残っている<sup>11</sup>。

### (3) 蚤の駆除法

かつてネズミノミはペスト流行時の病毒伝搬者として警戒されたが、現在、総じて蚤や虱の伝染病媒介の危険性は低下している。しかし蚤は蚊や虱と比較してかなり痒いため、強く掻きむしった結果、化膿したり、二次感染をおこしたりしやすい。先に森林太郎訳「蚤の歌」を引用したのは、このゲーテの悲劇『ファウスト』を装幀したのが、東京大学の第三代皮膚科学教室教授を務めた太田正雄（筆名・木下空太郎 1885-1945）だったという理由からだ<sup>12</sup>。太田の皮膚科領域での代表的業績と言えば、まず白癬菌の研究が挙げられるが、彼が 1937 年に南江堂から刊行した『動物寄生性皮膚疾患』（皮膚科泌尿器科学大系：皮膚科学 第 29 巻第 41 冊）も評価が高い。同書の「四翅皆欠如し、頭に単眼を有する」微翅目〔隠翅目〕に 5 頁にわたって蚤科蚤属の記述がある。といってもヒトノミ、ケオプスネズミノミ、イヌノミ、ネコノミの各種情報は『日

<sup>9</sup> Griendel, Johann Franz: *Micrographia nova: Oder Neu-Curieuse Beschreibung Verschiedener kleiner Körper/ Welche Vermittelst eines absonderlichen von dem Authore neuerfundenen Vergrösser-Glases Verwunderlich groß vorgestellt werden.* Nürnberg (Zieger) 1687.

<sup>10</sup> Rösel von Rosenhof, August Johann: *Der monatlich herausgegebenen Insecten-Belustigung.* Nürnberg (Fleischmann) 1746-61.

<sup>11</sup> Quelle Ausleihjournal; Goethe-Ausleihen Weimar Nr. 1129 (Keudell-Nr. 1114)

<sup>12</sup> 拙論「ゲーテと木下空太郎 皮膚科学との関わりを中心に」本専攻紀要『言語・情報・テキスト』20（2013）pp. 1-12 ほか参照。

本昆蟲図鑑』(北隆館 1932 年)の小泉丹(1882-1952)による解説をそのまま引用し、蚤の刺激やアレルギー反応などの 225 頁以降の 1 頁にも満たない部分が太田の執筆である。最後に 1888 年刊の『動物学雑誌』から蚤の駆除方法として以下の 2 つが引用されている。

- (1) 皿に石鹼水を盛り、中央にコップを置き、それに水を入れて、そのうちに油を注ぐ。かうして之を蚤の多い室に置き、夜間石油に火を點けると蚤は此処に誘はれて、皿の中に飛び入る。
- (2) 明礬を畳の下及び上に粉として蒔く。壁紙も明礬水に漬し乾いたのを用ゐる。又敷紙も寝具のシツも明礬水に浸したのを用ゐれば蚤が出ないと云ふ。<sup>13</sup>

(1) のような蚤罌 (Flohfall) はヨーロッパでも考案されたが、ドイツ国内の博物館展示<sup>14</sup>で筆者が実際に目にしたのは、火を使わない、象牙で出来た精巧なアクセサリー風のものだ。イエーナ大学医学部を卒業したドイツ・ヴォルフエンビュッテルの医師にして博物学者のフランツ・エルンスト・ブリュックマン (1697-1753) が 18 世紀初頭に考案したとされ、象牙を丸くくりぬいた中に綿を詰め、その中に蜂蜜やシロップのような甘い粘り気のある液体を塗ったものをねじ込む。象牙のペンダント風小型罌の側面には装飾を兼ねた蚤を誘い込むための小穴が複数開いており、これを胸元や下着に吊るしておく、蚤がかかる仕組みである。ヴァイマル図書館 (現アンナ=アマリア公妃図書館、略称 HAAB) は、ブリュックマンが匿名で発表した著書『新考案の奇妙な蚤罌』<sup>15</sup>の増補第 2 版 (1729 年) および 1739 年刊行の増補第 4 版の両方を所蔵していた。計 46 頁だった第 2 版が、10 年後の第 4 版では計 94 頁、約 2 倍の厚みとなり、情報量が増えていることに気づく。蚤罌についてはゲッティンゲン大学動物学教授 E. シミチェック著『造形芸術における昆虫』(ウィーン自然歴史博物館刊行小冊子シリーズ)<sup>16</sup>を特に参照したが、その 43 頁掲載のロココ時代の美しい象牙製蚤罌で、何とこれで捕獲した蚤を観察するため簡易顕微鏡とのセットになっているのに目が引かれる。何しろこのミニ顕微鏡の収納蓋内側上部には、「お前が私を刺すなら、次に私がお前を刺す」、下部には「報復は甘い」と書かれているのだ。

### 3. 〈蚤文学 Floh-Literatur〉の伝統 E. T. A. ホフマンの『蚤の親方』と並ぶ双壁として

日本の鳥獣戯画の伝統と同様に、ヨーロッパにもイソップ寓話を筆頭に、動物を主人公にして

<sup>13</sup> 『動物寄生性皮膚疾患』、226 頁から引用。

<sup>14</sup> たとえばドイツ・ドレスデン Panometer での初パノラマ展示「Barockpanorama 1756」(2006 年)。2022 年に同館で開催中のパノラマ展示「Dresden im Barock. Mythos der Sächsischen Residenzstadt」でも象牙に精巧な象の彫刻を施した蚤罌が展示されている。

<sup>15</sup> オリジナルタイトルは、*Die Neu-erfundene curieuse Floh-Falle, zu gänzlicher Ausrottung der Flöhe, wird, allen so mit solchem Ungeziefer beladen, communiciret von Einem Anonymo*。第二版はマルティン・ルター大学ハレ=ヴィッテンベルクの大学兼州立図書館のデジタルアーカイブでも公開されている。

<sup>16</sup> Schimitschek, Erwin: *Insekten in der bildenden Kunst im Wandel der Zeiten in psychogenetischer Sicht*. Naturhistorisches Museum Wien 1977, S. 42. シミチェックによれば、この蚤罌は Corvinus, Gottlieb Siegmund 著『女性実用事典 *Nutzbares, galantes und curiöses Frauenzimmer-Lexicon*』1739 年刊行の増補改訂版にも「効果の高い」蚤対策として紹介されているという (同頁)。

菌に衣着せぬ政治風刺や道徳的戒めをする文学作品の系譜がある。この動物寓話伝統に馴染んでいたゲーテは、1793年にフランス中世の韻文『狐物語』に取材し、ずる賢い狐を主人公に据え、近代市民感覚で封建社会を風刺した叙事詩『ライネケ狐』を発表している。また MA、FA 両全集の「蚤の歌」注釈には、日本ではシューベルトが付曲した『鱒』の詩で知られる風刺詩人 Ch. Fr. D. シューバルト (1739-91) が宮廷での情実人事をテーマに、動物で風刺した「鶏と鷹 *Der Hahn und der Adler*」を本歌取りしたはず、との指摘がある。

他方、16・17世紀に描かれた寓意画を集めた『寓意画便覧』<sup>17</sup>の第4部「動物界 Tierwelt」のうち「地上に棲む動物 Landtiere」に、たとえば〈狐〉に関する寓意画とそれに添えられたテキストおよび解釈が載っているが、「人間のお面を眺める狐＝空虚な見せかけ」、「ライオンの巣穴を回避する狐＝賢い不信感」、「水面で水音に耳を澄ます狐＝賢い注意」ほか、計3頁に渡り、さまざまな意味づけがあるのがわかる。同じ「動物界」の最後には「昆虫」があり、蜂・蟻・キリギリス・蜘蛛・蝶などの多彩な寓意画が並ぶが、「蚤 Floh」は出てこない。ただし最後に「害虫 Ungeziefer」という項目があり、「寄食者・居候・食客」の寓意として以下のラテン語テキストがドイツ語訳付きで載っている。

蚤や虱は栄養を得られなくなった死者の屍を去る。同様におべっか使いも腹が満たされている限りは世辞を言うもの。土地・名声・財産がある限り、貴殿の家は世辞を言う者に事欠かない。天候が変わり、不幸にして貧乏の身になると、彼らは貴殿を害毒のように忌避し、動物のように放置するだろう<sup>18</sup>。

今回、メフィストの「蚤の歌」を調べる過程で、ドイツ文学には詩、風刺、寓話など、さまざまな形で蚤をテーマとした〈蚤文学〉なる特殊な文学ジャンルがあることを知った<sup>19</sup>。蚤はフランスやイタリアの中世文学にも登場するが、それを手本にしつつ、16世紀以降のドイツ語圏にも蚤を扱う社会風刺的文学作品が出現する。興味深いのは、この時期、動物寓話の主要登場人物がライオンや狐のような動物から、身近で観察しやすい鼠や蛙などの小動物あるいは蚊や蚤などの昆虫にシフトしていくことだ。

なかでも有名なのが、ゲーテがかつて法学を学んだ地、シュトラースブルク出身の大衆的な風刺作家で、新教側擁護の論客としても知られるヨーハン・フィッシャルト (1547-90) の4000行を超える長詩『蚤退治 *Flöh Hatz*』(最終稿 1577年刊) だろう<sup>20</sup>。蚤と蚊の対話に始まり、人間の

<sup>17</sup> *Emblemata. Handbuch zur Sinnbildkunst des XVI. und XVII. Jahrhunderts.* Hrsg. von Arthur Henkel und Albrecht Schöne. Stuttgart u. a. (Metzler), 1996.

<sup>18</sup> 同上、Sp. 946 からの拙訳。

<sup>19</sup> 1913年刊行の Hugo Hayn と Alfred N. Gotendorf の共著で、16世紀以降の蚤をモチーフにしたドイツ国内外の文学作品を年代順に提示した著作: *Froh-Litteratur (de pulicibus) des In- und Auslandes vom XVI. Jahrhundert bis zur Neuzeit.*

<sup>20</sup> 本作品については精園修三:「ヨーハン・フィッシャルト『蚤退治』(1)」『中京大学教養論叢』第33巻第1分冊(1992) pp. 227-264 の解説および(1)~(5)の同第34巻第1分冊 pp. 221-253 計5回で連載された全訳を参照した。



女性を敵視する蚤は、台所女中の血ではなく高貴な淑女の血を欲するが、部屋が清潔なので近づけない。酷い悪事を働いているわけではないのに、女性たちに邪険にされている我が身を嘆き、ゼウスに不満を訴える「蚤の訴訟 Flohklage」から、法廷の場に移る。次に蚤退治の処方箋、蚤の歌といった豊富な言葉遊びや脱線もしながらエピローグに至り、女性たちと蚤の停戦・平和を迎えるという奇想天外なあらすじだ。ただし「蚤の訴訟」部分の前半は、マティアス・ホルツヴァルトの作品『蚤退治』テキストの流用であることが判明している。こちらは16世紀の叙事文学・戯作の紙業として広く用いられたクニッテル詩節が使われているのも特徴のひとつだ。人間の弱点だけでなく不条理な裁判のレトリックを中心テーマとし、当時最新の百科全書的知識を駆使して嘲笑した風刺詩であり、ゲーテも「蚤の歌」執筆時、本作品を参考にしたと思われる。

この〈蚤文学〉ジャンルにおける蚤の特徴は、その「遠慮の無さ」で、本来は秘密にしておきたいもの、影の権力行使や官能的身体を使った愉楽を暴露する役目を果たす。前述の寓意画テキストそのものの「人間の生活に寄生し、永久に付き添う存在」たる食客としてはもちろん、敏捷でエスプリに富み、官能的で極小の暴君といった蚤から連想される性質が擬人化されることが多い。そしてこれら文学的蚤の役割は、ちょうどゲーテ時代に蚤毚に附属する貴婦人の玩具から自然科学分野に不可欠な観察機器として受容され、定着していく〈顕微鏡〉と全く同じ、「目に見えないものを拡大して露呈させる」ことに他ならない<sup>21</sup>。

そして蚤文学はゲーテの『ファウスト』第一部でメフィストが歌う「蚤の歌」とE. T. A. ホフマンがゲーテの故郷フランクフルトを舞台のひとつとし、また同市で刊行した「冒険メルヒェン Märchen-Abenteuer」たる『蚤の親方 Meister Floh』を双壁とする。後者にはR. フック同様、顕微鏡で詳細な蚤の観察をしたオランダの博物学者レーウエンフックとスワメルダムを名乗る人物が登場するのも面白い。また主人公ベレグリヌス・テュスが、ゲーテが監督官を務めていたイエーナ大学に進学・卒業したり、文中でゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの徒弟時代』に登場する女性登場人物へのあてこすりがあったり、ゲーテへの風刺要素も含まれるようだが、紙幅を超えるので、本稿では言及しない。

蚤文学の系譜は、ゲーテの韻文「蚤の歌」とE. T. A. ホフマンの散文『蚤の親方』を頂点に、19世紀末に姿を消す。他方、20世紀に入り、特に第一次大戦以降、欧州では人体に害を与える寄生虫・害虫等の毒素の学術研究が進んだ。ちなみに日本では1920年、慶應義塾大学医学部病理学細菌教室に寄生虫部として発足したのが初の寄生虫学教室とされる。同教室初代教授・宮島幹之助(1872-1944)の交通事故死により二代教授に就任した小泉丹の『動物寄生學』第1巻『人體寄生蠕蟲篇』(1923年初版)を、日本における寄生虫性疾患についての良書として太田正雄は真っ先に挙げている。寄生虫の駆除の徹底・予防知識の啓発とともに、風刺文学の主人公としての蚤はもはや登場の機会を完全に失ったのだった。

<sup>21</sup> 以上、〈蚤文学〉の伝統については、次段落で言及するE. T. A. ホフマンの『蚤の親方』に関する冊子Borgards, Roland: „Es war ein Floh, und doch kein Floh“. E. T. A. Hoffmanns letztes Märchen-Abenteuer. Frankfurt a. M. (Freies Deutsches Hochstift / Frankfurter Goethe-Museum) 2021を参照した。